

【1日のスケジュール】

- 5:00 起床
- 5:45 朝食の配膳に向かう
- 6:00 お寺にて子供たちの朝食配膳
※6時頃からお祈りが始まります
- 7:00 朝食
- 8:30～ 授業開始
※午前中は幼稚園で遊ぶ or 学校の授業と一緒に参加しました。
- 12:00 お寺にて子供たちの昼食配膳
- 12:30 昼食
- 13:00～ ※昼食後、幼稚園ではお昼寝があるので、学校にいました。
- 16:30～ お寺にて子供たちの昼食配膳
※放課後、クラブ活動その他様々なアクティビティがあります。
私はタイ舞踊と一緒に踊りました。
- 19:00～ 夕食
- 20:00～ 孤児院にて子供たちと遊ぶ
- 21:30 帰宅
- 23:00 就寝

毎朝7時半頃から朝礼がありました。全校生徒が列を作り並びます。楽器を演奏したり、歌ったり、先生方からの挨拶があったりと、日本の全校集会と似ているように感じました。列を作るのも、遅れてきた生徒を並ばせるのも、全て上級生が行っていました。先生方は後ろから見ていました。



【食事】

朝食、夕食はチョン先生やエイ先生が作って下さいました。日本人向けの味で料理して下さい、どれも本当に美味しかったです。調味料の一つに味の素を使っていると聞き、驚きました。辛さや量などは我慢せず、ちゃんと言った方が良いと思います。タイ語指さし帳を用いて、「少なくして下さい」「辛くしないで下さい」等の単語を覚えておきました。



朝食：おかゆやヌードルが主でした。サイドにクッキーやクラッカー、ジュースやタイ豆乳等がありました。



夕食：タイ米が主食になります。スープとおかず2品ほど、デザートにフレッシュフルーツが用意されました。

昼食は学校すぐ横の屋台レストランでした。



飲み物はお水、炭酸飲料がありました。ヌードルや焼き飯、ガパオ、肉野菜炒め等メニューは豊富でした。現地のレストランであるため、少し辛さは強いという印象を受けました。辛い味付けが苦手な方はここでも「辛くしないで下さい」のタイ語は欠かせません！

【幼稚園にて】

午前中幼稚園で過ごすことが多かったです。日本の歌や折り紙等で交流しました。折り紙は一人一枚配るのもなかなか大変で、途中から一緒に折るというよりも、子供たちに「折って、折って」と頼まれる方が多かったように思います。全員が簡単にそして一緒に遊べるものは何かと模索していました。手遊びも簡単なものだと飽きずに楽しめました。

子供たちとは英語でコミュニケーションをとることが出来なかったため、言語で理解し合うことは難しかったです。





クラス内では英語やタイ語の授業、映画鑑賞も行われていました。パソコンを使って図形を描いたり、タイ語の発音のトレーニングもしたりしていました。



アイスクャンディーやスナック等、午前中はお菓子の時間が多かったように思います。



11時頃に給食の時間があります。タイ米に汁物のおかずでした。こちらでは配膳のお手伝いをさせていただきました。



昼食後は歯磨きをし、昼寝の時間が設けられています。

○良かった点

言葉でのコミュニケーションはなかなかうまくとれなかったものの、ジェスチャーで分かち合えることができました。手遊びは本当に盛り上がり、何度も「もう一回、もう一回！」と興味を示してくれました。日本のこどもの共通点も見つけることができました。それは、タイのこどもたち、特に女の子はおしゃれに関心があります。髪の毛を編み込んだり、折り紙で作ったリボンを付けてあげたりすると、とても喜んでくれました。

○反省点

折り紙は日本文化を伝えるのには最適なアイテムですが大勢で共に交流となると

なかなか難しかったように思います。また字がまだ読めない子が多かったのでタイ語をカタカナで読むだけでなく、発音をしっかり前もって練習しておくべきだと反省しました。（上級生になると字を見せただけでも、カタカナ発音であっても理解しようと歩み寄ってくれましたが、幼稚園生との間ではそう簡単ではありませんでした。）

【こどもたちの食事風景】

朝食 6:00～

昼食 12:00 過ぎ～

夕食 16:30～

毎食前に必ず 20 分から 30 分程のお祈りがありました。

昼食時は 4 限目が終わると左下図のように、皆列に並んで 5 分程離れたお寺へと向かいます。そして食後もまたこのように列になって学校へと戻ります。途中途中に上級生が立って、いい加減に列を乱したりしていないか監視しています。

日本もマナーやしつけについては厳しい方ですが、タイは更に礼儀作法やどんな時も列を作って順番に並ぶという意識が強いと、感心しました。



食事前に何枚かのプレート洗います。食器は日本のようにお椀とお皿に分かれ複数使うのではなく、ワンプレートと、とてもシンプルでした。幼稚園でも同じようなお皿が使われていました。

直接テーブルに向かう生徒もいたので当番制で交代に行っているように見えました。



グループごとに列を作ります。普段は上級生が食事を運び、配膳をしています。私は今回この配膳のお手伝いをしました。具体的には、プラスチック製のお皿でごはんをいれていきます。しゃもじでは一回で多くの量を入れることができないために、工夫されているのかなと思います。何百人もの配膳をするため、途中から手がつきそうになりましたが、毎日行っている上級生の方たちのことを思うと胸が熱くなりました。



皆、ごはんをいれると、お膝を曲げます。「ありがとう」という合図だと感じました。

日本にはないこのタイの文化に感動しました。

食事場でも足元を見ると何匹か野良犬がいたため、衛生面には疑問をも感じました。

【学校での様子】

1クラス40名以上という大人数でした。英語の授業を主に観察させて頂きましたが、日本の授業よりもやや自由度が高いように感じました。日本は私語や出入りは厳しく注意されますが、ワットサケオでは教室の出入り等は禁じられていません。クラスを中断したり、よっぽど周囲の迷惑になっていたりした時には、先生が細い棒（70cmくらいの定規のようなもの）で叩きます。日本では体罰と見なされますが、そのようなしつけもよく見かけました。



パソコンとスクリーンを用いた授業で環境は整っていました。

←タイの女の子たちは皆ポニーテールにリボンのスタイルです。学年によってリボンが青や白と様々でした。制服も曜日によって異なるとネットで調べていましたがその通りでした。特に男の子の変化が大きく見られ、曜日ごとに全身（靴まで）違うスタイルでした。



クラスの中には何人かお坊さんになるための修行中の生徒がいました。聞いたところによりますと、修業は1週間ほどのようです。

よく見るとそれぞれ使っている辞書は異なり、授業ごとに先生が配りまた回収していたので、一人のものではなく皆で共有していることに気付きました。



授業が終わり夕食を済ますと、様々なアクティビティに参加します。私はダンスや日本舞踊をしている経験から、こどもたちと一緒に踊りたいと思い、タイ舞踊のクラブへ通いました。タイの舞踊は日本とはまた大きく違ったスタイルで、初めての私にとって非常時

私にとって非常に新鮮でした。体を動かすと、やはり言語では分かち合うことの出来なかった彼らとの距離が一気に縮まり、確かな手ごたえを感じる事が出来たのです。

【孤児院での生活の様子】



夕食後は毎晩女子寮へ遊びに行きました。部屋に入るなりたくさんの子どもたちが「こっち！こっち！」と手招きしてくれます。

折り紙を使って交流したり、日本の手遊びをしたりと、非常に有意義な時間でした。私はこの時間が一日の中で一番楽しかったです。

学年によって分かれているのかは定かではありませんが、上級生が下級生の面倒を本当によく見ていたことに驚きました。シャワーの準備や布団を敷くのも、全て大人たちの援助無しで行っていたのです。おしゃれ好きな年頃の彼女たちは髪型やお化粧品にも関心があるようで、眉毛を描いてと頼まれたり、髪の毛をアレンジしてあげたりしました。

土曜日の午前中、学校では授業がありますが、幼稚園ではお休みです。孤児院では幼稚園生が遊んでおり、門を入るなり走って駆け寄ってきてくれました。2段ベッドが3つくっついて、それが何個も連なるその部屋は、決して広いとは言えませんが、皆それぞれのベッドの布団をきちんと片づけ、また洗濯も自分たちで行っているようでした。

私が入るなり、床のごみをほうきで掃き綺麗にしてくれたり、扇風機を当ててくれたりと、まだ甘えたい年齢であろう小さな彼女たちの心遣いには涙をおさえることができませんでした。



【こどもたちの笑顔】



【私が今思うこと】

たった8日間だったかもしれませんが、一步踏み出し今回のプログラムに参加したことを心より誇りに思います。タイでの経験を通して私が強く疑問に思ったことは「ボランティアって何だろう」でした。ボランティアという言葉の重み、そして難しさを知ることになったのです。渡航前は何かをしてあげたい、彼らの役に立ちたい、その一心でした。実際にワットサケオスクールに到着して子どもたちの生活する場で私は悩みに悩みました。「これをして下さい。」と与えられていないスケジュールの中で、どう自分が行動できるのか、どう子どもたちと打ち解けることができるのか、アイデアが浮かばずにただただ考えていました。今思い返すと、それまでの私は「してあげたい」という概念にとらわれ、どこか上から目線で物事を考えていたのではなかったかと反省しています。給食の配膳も確かにボランティアと呼べるのかもしれませんが。少しでも、このたった一回でも毎日手を痛めながらお皿に盛りつける上級生と変わることができるのであればと、無我夢中にご飯を配膳したことを鮮明に覚えています。彼らは何も必要とはしていないのでしょうか。あるものの中で、今ある環境で、できることを最大限にし、日々励んでいるのだと感じました。私が何かをしてあげたいと考えていたことは、実際には彼らは必要とはしてこなかったのであろう事実気がついたのでした。

子どもたちと触れ合う時間が多くもてたことは、何よりの財産でした。孤児院での交流が一番楽しかったと先ほど申し上げましたが、ここでもいくつかの課題にぶつかりました。例えば、折り紙をしようと紙を配り始める時、いつも決まって私の近くに座る子たちがいました。上級生は下級生が勢いよく私に寄ってくるのを見て声をかけ注意しながら、決して私もほしいとは言わないのです。この光景を見た時、私はいかに彼女たちが我慢の精神を貫いているのか、そして自分よりも下の子たちにと気配りをしているのか、目の当たりにしました。上級生と言ってもまだ思春期を迎えるか否かの年代であり、甘えたい気持ちは同じでしょう。私はそんな彼女たちも遠慮なく、全員で遊べるものは何かと一晩考えました。そこで生み出したアイデアは「アルプス一万尺」を一つの円になってするというものでした。私なりに創作を加え、皆が両隣の人と手を合わせたり、腕を組んだりできるようにし、ゆっくりと教えました。すると、その成果が顕著に現れたのです。折り紙では少数の子どもとしか深い交流ができなかった昨晚。それが今では、全員が手を取りあって円を作り笑っている。あの瞬間を私は忘れることはないでしょう。そして、あの瞬間こそが私がこのプログラムを通して得た「私がここに来て良かった。」「彼女たちと出逢えて良かった。」という体験でした。

ワットサケオスクールの子どもたちと出逢って、厳しい現実にも直面しました。私が孤児院を離れる時、誰もがみついたり抱きついたり、だっことせがんで来たりしないのです。一緒に遊んでいる最中はだっこにおんぶも当たり前でしたが、毎晩帰る時には手を振り、あっさりとした別れでした。それは最終日も同様でした。きっとボランティアとしてたくさんの人が世界各国から集まってくるので、別れにも慣れてしまっているのだと感じました。

最終日、甘えたい気持ちを抑え、普段と何も変わらない様で前を向いて堂々と歩いていく子どもたちの後姿を見た時、私は「ボランティアって何だろう」の答えをまだ追い求めている気がしました。短期間で寄り添うこと、全てを理解し合うことは並大抵ではありません。それでも、8日間立ち止まって私に考える時間を与えてくれたワットサケオスクールに感謝します。

